

幻影の国の吟遊詩人

# 天空の道

三界の扉

頭上には朱に染められた梁の列。そこからカントウヤの木肌で作られた札がいくつもぶら下がり、楽士達の奏でる音色と踊り子達の足踏み、そして料理の湯気と客達の熱気の中で、左右に揺れて回っている。札に朱で記された文字は、ひどく雑多な情報を遠来の客達にそれとなく告げる。カントウヤの森神への賛歌、短い夏への憧歌、旅人の哀歌、詩人の琴歌、遊女の情歌、狩人の踏歌、そして古くからの導歌、偉人の死を伝える<sup>るいか</sup>誄歌、新しい出来事、誰ともなく向けられた伝言。

いびつな馬蹄型のテーブルの一つに、数人の旅商人達がたむろしている。身体からまだ埃も落とさぬ。今朝方街へ入り、それぞれ市場で荷をひと捌きした後であった。

「この都も、随分大きくなったものだなあ。人も多くなった」

「まったくだ」

「ここは久しぶりなのかい？」

「わしは西州を主な仕事場にしてるんじゃ。ここまで足を延ばしたのは十数年ぶりだ」

「東州本土との通商路が拓けてしまったからな。おかげでカントウヤの値が下がっちゃったが、東州の絹が手に入りやすくなったのはいいことだ。人が多くなったのは、東州人が入って来たからと言うより、絹を求める西州人が増えたからだ。ただ、俺が餓鬼だった頃に比べて、この都も東州の匂いが強くなったかな。そら、あの踊り子どもの舞い方を見てみるよ」

「まあ、ここがどこかと言ってしまうえば、紛れもない東州だからだよ」

「この天空の道を最初に切り拓いたのは、俺達西州人だったってのに。……おい、何かこっちに来るぞ」

「よおよお。西州からの客人よ。俺も仲間に入れてくれんかね」

「好きにしろ。席はまだ空いている。ところで東州から、何か面白い話は持ってこなかったか？」

「面白いも何も、東州商人達は帰り道を塞がれちゃったよ。まだ聞いてないのか。トルバルクの道が崩れたんだ。地下に巨大な洞が空いていたらしいな。橋をかけるとか言うが、いつ帰れることやら。あそこは黒い森が豊かでいい稼ぎ場なんだが、目と鼻の先でおあずけくってるわけだ。それより、西州から面白い話は入ってないか？ 馴染みの遊女に、色々話してやりたいと思っててな」

「たいした肝の据わりようだな」

「おい姐ちゃん、酒をひと壺よこしてくれ。さて、あんまり血なまぐさい話はよしてくれよ」

「天空の道一番の豎琴師、エツベルの近状は知ってるかの。その演奏は、森の獣ですら耳を傾けに姿を現すって、あれだ。西州で名を上げた漂泊の楽士で、豎琴を奏でながら歌も歌う、あれだ。けしからんよ。奏でるか歌うか、どちらかに集中しろというに」

「東州じゃ、珍しくはない。だから西州で耳を惹いたんだらう。確か今どきの言葉で、吟遊詩人と呼ぶんだ。続きを」

「ウワカンの太守が、数年来の夢がかなって、エツベルを館に招いてもてなしたそうさ。ところ

がある晩、エツベルが太守の女奴隷を一人、さらって逃げ出してしまった。エツベルは太守の家来に追われながら、天の峠を越えて東州を目指しているようだ。一方で、東州側の商都は、そいつの到着を首を長くして待っていると」

「ほう」

「エツベルはもともと東州の生まれだったらしいな。俺達も近々、すばらしい演奏が聴けるかもしれんぞ。豎琴師がやってきたら、きつとこの都の主は、俺達を招いて宴を開くはずだからな」

「いい話を聞かせてもらった。ありがとうよ。しかし女奴隷とはまた意味深な。なあおい、それなんだ？ あんたの頭の上にぶら下がってる札」

「これか？ ええと……『花一華の都 石の肌持つ遊女 ピャフィフィの家』だと。へえ、石の肌か！ 異人遊女だな。しかし発音しにくい主人の名だ」

「興味深い事が書いてあるよな。この下げ札ってやつには。こっちにはなんて書いてあるのかね……」

「ピャフィフィはその名のとおり、小鳥がさえずるように、美しい声で歌った西州の女だ。ピャフィフィの家と言えば、西州古典芸能に卓越していることで有名だった。今もそうなんじゃろうか。わしはもう長いこと行っとらんから、よく分からんな」

「石の肌か。本来なら、王族や富豪の観賞用奴隷としてしか取引されとらんが」

「おおかた傷物なんだろう。それでも、玉代が馬鹿になりそうだな」

「なあ、誰かこの遊女のことを知ってる者はいないか！ 都セゲアテルの石肌の遊女を！」

酔った勢いで声を張り上げ、店内を見回す。別のテーブルで踊り子の少女を膝に乗せ、食事をとっていた身なりの良い東州商人が、こちらに顔を向けた。

「あれの舞は超一級だ。口を開けば愛想も教養もないが、神託だとも思えば聞けんこともない。しかしあの娘の肌と髪の色はすばらしい。肌は純白、髪は純金。陸中海の雲と陽光を思い出させてくれる。この太陽神の恵み薄い、寒々とした辺境の地でな。長い首と手足も見事だ。あの容姿こそ、人間の遊女にはない、異人遊女ならではの妙よ」

「いい舞手なら、見に行くだけでも価値がありそうだ。だがプ……ピャフィフィの舞台は高いだろう」

「遠目に拝んだって見事なもんだ。あれだけ背が高いんだからな。だが手は出せまいよ。俺ほどの稼ぎにならん限りは」

それを聞いた旅商人達は、あいまいな笑みを浮かべながら互いに顔を見合わせる。それから彼らの話題は、別の下げ札に書かれたものへと移っていった。

天空の道とは、翼竜大陸を東西に走る交易路の一つである。名の由来は、西州と東州を分かつ竜骨山脈越えの道が雲の上まで届くことから来ている。その峠は人間が到ることのできる場所の中で、最も天に近いと言われる。

天空の道において主に取引されるのは、東州西州からの品物だけではない。カントウヤと呼ばれる樹木は、天空の道の貴重な特産品である。耐火と防腐性に優れ、頑強さとしなやかさを併せ持ち、魔力を帯びている。これを使った建物は、悠久の時を得るという。また森にあってこの木

は枝を伸ばし、互いに絡み合う性質を持つ。そのためカントウヤの森は枝葉の厚い天蓋に覆われ、他の樹木は淘汰される。カントウヤを切り倒すのは至難である。根を切り他と繋がる枝々を絶ってはじめて、森から持ち出すことができる。厚い葉が幾重にも重なって日を遮り、森の底は常に暗く、故に黒い森と呼ばれる。

カントウヤは人間達の住む地域、すなわち人間界において、異界に近い場所にしか存在しない。つまり天空の道は、人間界最南を規定する境界線でもあった。道から南へ逸れれば、そこはもう人間に許された土地ではない。魔力を持つ地は様々な幽鬼を生み、風に黒いまじないをかける。人々は異界の危険な息吹にさらされながらも、カントウヤという貴重な宝を求めて行き来した。

その天空の道を構成する都市は百余り。要となる都市は八つある。いずれもそばにはカントウヤの黒い森を持ち、都王はそこから得る利益で莫大な富を築いている。中でもセゲアテルはより豊かな黒い森を持ち、異界にもっとも近くにありながら、富と文化の隆盛を極めていた。さらに東州へ通じる ひがしだいほくどう 東大北道 が拓かれると、新たな人と物の流れが生まれ、都は天空の道の珠玉とまで呼ばれるようになった。

都に並ぶ多くの建物はカントウヤからなる木造建築であり、黒い森さながら家々は壁や梁を共有し、密集して巨大な構造をなしている。赤い土壁にはカントウヤの木肌を裂いた繊維が火除けのまじないと共に混ぜ込まれ、白と紺に彩色された柱が縁取っている。その都の姿を、遙か沿岸地域から来た旅人は巨大船となぞらえた。

都の富を根底から支えるのが黒い森であったなら、文化を生み出したのは都の花街である。西州の風俗に色濃かった都も、東大北道が拓いた後は、ここで最初に東州の文化が融合された。東州の物語が入り、東州の楽が奏でられた。芸妓は東州の着物をまとい、遠方からの客人をもてなした。

花街で古くから遊女の家を持つピャフィフィは、未だ新たな流れに乗り切れない女主人である。幼い頃より西州の着物と楽で育った彼女には、近年の東州かぶれは苦々しいものだった。西州芸能に固執する隣近所の遊女の家が傾く中、彼女の家がまだどうにか持ちこたえていたのには、彼女自身あまり認めたくない理由がある。彼女が抱える遊女は、全て異人だった。その物珍しさは東州商人には新鮮で、彼女らが人間の楽を奏でること自体もまた味わい深く、人目をひいたのだ。彼女が仕込んだ一流と自負する西州芸能は、客達には二の次であった。それでも結局、彼女はめげなかった。

「猫の子を拾ったら、日増しに大きくなって、一人前の娘になっちまった。言葉まで覚えてあれが欲しい、これが食べたいとうるさいから、自分で稼ぎなとワルバを持たせたのさ。あの子は毎日しゃんしゃんワルバを鳴らして、この家の柱を立てた。あたしの歌が壁を塗って、旦那方の心付けが屋根になった。あの子と一緒になら、クルートドゥルーの うたびと 詩人にも引けをとらない」

猫の子は先に年をとって天へ昇ったが、さえずる女は若作りをしながらますます太り、他の異人娘を引き取って育てるようになった。彼女自身の生い立ちでは、他に生かし方を知らなかった。一人引き取るたび、彼女は仔犬が犬にならなかつただの、子ヤギが羊娘になつただのと馴染みに愚痴ってみせては、家に呼び込んだ。

ピャフィフィが石花娘<sup>ヒツカハナノメ</sup>を家に迎えたのは随分前のことだ。この種の異人は見た目も趣があり、人間の相手も十分にこなせる。彼女がこの異人娘を引き取るのにいくら払ったか、花街では色々取り沙汰されたが、傷物だと分かるとやっかみ半分の噂も絶えた。

石花娘は引き取られてしばらくの間、遊女の家の中庭で、やつれた白い身体を日に当てて寝てばかりいた。踊りもしなければ、口もきかない。

数ヶ月おきにピャフィフィは彼女をある医師に見せに行った。医師は異人を診るのを専門としており、その知識から異人売買の仲介も兼ねていた。花街から出られない異人遊女のため、街の一角にある家へ定期的に出張している。この医師はトカゲの異名で呼ばれる覆面の男で、本当の名を知る者はいないようである。彼は石花娘を早々ピャフィフィに厄介払い出来て、内心喜んでいるようだった。

「あたしがこの子を引き取ってから、憑き物が落ちたような顔をして。もともとあなた様は、日向にいたって日陰にいるような顔をしなさってるが。たまには茶屋に出て、人間の娘相手に気晴らししたらどうですかね。知り合いに頼んで、いくらでも好みのを紹介いたしますよ」

トカゲは女主人の戯言に暗い顔を歪めただけだった。石花娘は女主人の隣でトカゲに冷たい視線を投げていたが、彼が人間のふりをしながらその実、彼女と同じ石花族であるのを知っているからだった。

「銀貨一万五千だ。それ以上は出せん」

部屋の主であり、長身瘦躯のトカゲと名乗る男が、短く言い放つ。旅商人はトカゲと娘の間に立ちはだかり、頑固に首を振る。

「都王のところへ行っても良かったんだぜ！ それをわざわざあんたの所へ運んでやったのに、そりゃないだろ。この娘は、石の肌を持ってるんだぞ！ 魔力封じの腕輪だって高くついた。相場は、白絹四山、カントウヤの大木一本らしいじゃないか。せめて二万はもらわんと……」

「石花族は、他の異人と違って、体調の扱いが難しい。だから俺を通さねば、売買はできんことになっている。俺の付ける値が気に入らぬなら、もう五つ町を越えて、俺の同業者のところまで持っていけばいい」

「さすがに、そこまでは足を延ばせねえよ」

言葉を詰まらせた旅商人へ、トカゲはとどめとばかりにこう言った。

「なんなら、ここで娘を裸にして、もっと詳しく見立ててやってもいいんだぞ。旦那がどうしても正当な値をこの娘につけて欲しいというならな。だがそんなことをする暇があったら、俺は一刻も早く、この娘にまともな治療を施したいんだ。ぐずぐずしていると、元も子もなくなるぞ」

「ええい、仕方ない。分かった」

トカゲの指差す先には、敷布の上でうずくまる背の高い娘の姿がある。ぼろをまとい、剥き出しの手足は生乾きの傷で覆われている。肌は純白に近く、長い髪はさらに白かった。

旅の途中、異界間近の崖で異人娘を偶然拾っただけの旅商人にしてみれば、銀貨一万五千でも濡れ手に粟の大儲けだ。それにただの食品商である彼には、奴隷売買というものはいささか勝手が悪い。彼はトカゲの秘書と契約を交わすために、別室へ引き下がっていく。

部屋の引戸が閉まるのを確認すると、トカゲは素早く棚へと歩み寄る。鍵付きの引き出しの一つから、掌におさまる程度の小さな翡翠の瓶を取り出した。彼は机の上に伏せて置いてある湯飲みに、瓶の中身を空ける。瓶からは透明な液体が糸を引くように零れ落ちる。彼は水差しを片手にとり、小瓶の中を少量の水で数度洗い流し、中身を全て湯飲みへ移しかえる。

彼は湯飲みを片手に、ようやく娘へと歩み寄る。上半身を引き起こすと、娘のまぶたは血と膿で閉じている。彼は奥の部屋に「おい」と呼びかけ、しばらく待って誰も来ないと分かると舌打ちした。

「耳は聞こえるだろう。人間は、お前達を石花と呼ぶ。ずいぶんひどい様だが、崖の下でなく上にいたというのはどうにも分からん。崖を転がり落ちたんでなく、転がり上がったのか」

彼女は朦朧とする意識で、故郷の言葉に耳を傾ける。

「二、三度転がり落ちて、最後に一度だけ這い上がった」

彼女は寂しげに呟く。トカゲが手に持つ湯飲みから芳香のようなものを感じとったらしく、そちらに顔を向ける。それは鼻で匂うものではなく、魔力で匂う類の物である。魔法を封じられても、異界の民である石花は本能的に知ることができる。

「まずはこれを飲め。水と、水のようなものだ」

トカゲが湯飲みを差し出す。娘は無気力に両腕を下げたまま動かなかった。

「水は、結構。飲んででも飲んででも、渴きは癒されない。飲みすぎて、体を冷やしてしまった」

「人間達の国は、土地の持つ魔力が薄い。お前達にとって、そういう土地はまるで砂漠のようなものだ。お前の感じている渴きは、肉体に由来するものじゃない」

娘は答える代わりに手を差し出した。指先は割れ、爪は剥がれかけていた。

崖を登ったというのは嘘ではないかも知れぬ。あの旅商人は、青霧山地の崖の道で彼女を拾ったと言った。崖の道を通る隊商は全て、邪精除けの守り袋を持ち、風のように速く通り抜けようとする。あそこは天空の道全行程中で、最も異界に近づく道なのだ。崖の下から南は大地が強い魔力を持ち、石花族を含む魑魅魍魎が闊歩する世界である。

トカゲは娘の蒼白の肌と純白の髪を値踏みし、ついでひどい怪我の分を差し引いて勘定する。娘の身体には新しい傷だけでなく、古い傷跡も無数にあった。二万でどうにかなるならまじだが、それもまずは命を保証し傷跡が目立たなくなるような処置を施してからの話だ。

トカゲが考えを巡らせる間に、娘は水を飲み干す。彼女の手から湯飲みが落ち、暗い部屋に高い錫の音が響く。トカゲは音で娘に視線を戻した。手を叩いて人間の召使達を呼び寄せる。現われたのは体格の良い二人の中年女で、担架を手に行っている。

「早く来いと呼んだだろう」

トカゲは怒鳴り、落ちた湯飲みを拾い上げる。

「自分で担架に乗れるな？ まずはその不潔な体を洗って傷を縫合し、病の精を退治する薬を調合せねばならん。湯飲みに血を数滴垂らせ」

娘は言われたとおり、指先の傷を押し開いて、湯飲みへぽたぽたと血を落とす。その後彼女は、二人の召使によって隣室へ運ばれていった。

トカゲは再び棚へと歩み寄り、引き出しから携帯式の薬箱を取り出す。湯飲みの中へ薬草の粉

末を振り入れ、娘の血液とよく練り合わせる。

石花族は、人間達の分類から言えば異人の中でも擬人と呼ばれる種族に分類されていた。言葉どおり、彼らの姿形は人間と変わるところはほとんどない。違うところといえば、石花達の頭髮と瞳の色彩が最も主なものだろう。人間達が彼らに花という言葉をつけたほど、それらの色彩は多種にわたっていた。褐色系の頭髮しか持たない人間達からすれば、赤や緑や青などの髪と瞳を持つ石花は、まさに色彩の申し子達であった。石花の肌は多くの場合人間のものと異なるところはなかったが、石の肌と呼ばれる純白あるいは漆黒の肌を持つ者がいる。それは石像が生きて動いているような神秘的な趣がある。浮世離れしたその姿は特に身分の高い者に好まれ、美術品に似た高値の扱いを受けている。

しかし石花達の本質は、そのような姿にはない。魔力に満ちた大地に住まう彼らは、非常に強い魔法の力を有していた。彼らに宿る魔力は現身の存在を凌駕しており、肉体が五感を持つと同じように、魔力においても五感を持っている。それ故に、石花達は人間と似たような姿を持ちながらも、まったく別の生き物である。人間との合の子は生まれ<sup>こくすい</sup>ないし、病をうつされても発症しない。逆に、人間には想像もつかない病にかかることがある。黒水病は体が徐々に黒い水となって溶け出す<sup>こくすい</sup>が、その水は人間には恐ろしい毒となる。かつてその病にかかった石花は、主人である貴族とその館に務める者ほとんどを死なせてしまった。病の初期にあったその石花が触れたもの、踏みしめた床、呼気、全てに黒水がついていたのである。

トカゲは四本の銅製薬匙を取り出し、それぞれで練った血液を少量採る。左手の指の間に四本の薬匙を立てると、右手をそれらにかざす。小さな閃光が各々の薬匙に灯り、一瞬緑の炎を上げて白煙へと変わる。四つの炎はどれもみな同じ色合いで、薬匙の先には黒い炭だけが残った。娘は、特にこれといって厄介な病の精は持っていないらしい。人間からも病をうつされた形跡はない。人間を悩ます病の精は、石花に害を及ぼすことはまずないものの、石花の体内に隠れ潜むことはできる。そして別の人間がその石花と接触した時に、病の精が宿代えすることがあった。逆も然りである。

それから彼は、熱冷ましの薬と麻酔薬を調合する。隣室から女の悲鳴が上がって、召使の一人が彼の前へ走り寄って来る。彼女は濡れた両腕を振り上げながら、彼に訴える。

「申し訳ありません、旦那様！ 娘の髪に湯をかけたら、髪が溶けてしまいました！」

トカゲは中年の召使をじろりと睨み、つまらなさそうに説明する。

「慌てずに、娘の髪を探すがいい。ちゃんと頭に付いている筈だ。あの娘の髪の色は、水のように透明なのだ。石花の髪を脱色したら、ああなる。乾いている時、白に見えていただけだ」

主人に睨まれ、来た時よりも慌てた様子で召使は部屋から出て行く。トカゲは出来上がった薬をまとめると、召使の後を追うように、同じく部屋を後にする。隣室では暖かな湯気と薬湯の芳香がもうもうと上がり、衝立の向こうで湯の跳ねる音がする。

「最後は白湯で、念入りに洗い流せ。傷口を広げないよう注意しろ」

トカゲは衝立の向こうに怒鳴り、その部屋を通り過ぎてさらに奥へと入っていく。最奥は、売り物となる異人を閉じ込めておく場所だ。小部屋が三つ。彼は見張り用机の脇から火鉢を引き摺って行き、小部屋の一つへ運び入れる。火鉢に火を入れると、見張り用机も小部屋の寝台脇へ持つ

ていく。彼はしばらく小部屋から姿を消し、戻ってきた時には手術具一式と燭台を手にしていた。机の脇に腰掛け、照明に火をともし、手術具の刃を炙っているうちに、召使達が洗い上げた娘を小部屋へ運んできた。娘は腰帯一つで担架の上でなすすべなく横たわっているが、トカゲが手にしている物を見て、身を震わせた。腫れたまぶたは綺麗に開き、緑の影を落とす琥珀色の瞳が刃に映っている。

「それで何を」

「ましにするんだ。その傷を」

召使達は娘を寝台へと横たわらせた。娘は非常に背が高かったため寝台に納まりきらず、足の先が宙に浮くことになる。召使の一人が、足を支える台を探しに部屋を出て行く。

娘は居心地悪そうに、そして怯えた様子で、トカゲの持つ小刀をじっと見つめた。

「ささくれている傷の縁をきれいに切りとって、縫合する。治りも早くなるし、傷痕もきれいになる。麻酔をかけるから、痛くはない。眠っている間に終わる」

「崖の上には行くなと言われていた。人間達がいるから。私は罪を犯して上まで逃げなきゃいけないけど、まさかこんな末路があったなんて」

「末路の先が長いもんだ。何をしたか知らんが、ここまでくれば過去は関係ない」

麻酔の粉末を手にとったトカゲは、思いがけず娘に刃を持った腕を掴まれる。その力は強く、振りほどこうにも肩すら動かさない。

「あの崖を越えるのは、処刑を免れたい罪人くらい。あんたもそういうわけが——」

それが少なくとも、正体を見破られたとトカゲが知った最初の瞬間だった。彼は忌々しく、娘の鼻先めがけて麻酔粉を投げつける。

「俺が石花だと知れたところで、どうということはない。お互い処刑を免れて、生きたままあの世に来たようなもんだ」

トカゲは覆面の目元を引っ張り、布の奥へ瞳を隠した。彼の姿のなかで人間離れしたところは唯一、その瞳の色だけだった。彼は力の抜けた娘の腕を振り払い、陰気につぶやく。

「幻影の都へようこそ、御嬢さん。髪に色が戻るのが楽しみだ。その肌と髪で、クルートドゥル一の詩人達に靈感を与えるがいい」

それから十日としないうちに、トカゲはピヤフィフィに新しい異人娘が来たと言紙を出した。異人娘の傷はほぼ生涯に渡って消えず、背も高すぎてまともな売値にならないと踏んだのだ。ピヤフィフィはこういった異人娘を安く買っては、芸を仕込んで稼がせるやり方をとっていた。見た目の珍しさや美しさは、他の異人遊女の家ほどこだわってはいない。彼女は自分の領分と客の懐の内をよく分かっている。

ピヤフィフィは娘の傷に文句をつけながらも、珍しい石肌の石花が手に入って喜んだ。

「芸を仕込むには、とうがたってるね。それに怪我もまだ治ってない。今後お宅に通う分の薬代も差し引いとくれ。その都度払うからさ」

彼女は値切るのを忘れず、結局銀二万で娘を連れ帰った。しかし娘は石花の舞に熟達しており、ピヤフィフィは東州の舞に対抗できると希望を持つ。ところがトカゲにはそのことを隠し、娘の舞が評判になった後でトカゲが乗り込んで行っても、売買は終了していると安く買い叩いた分

は一切支払わない。おまけに薬代も随分けちって、娘を診察に連れてくるのは四ヶ月ごとがやっ  
とだ。代わりに茶屋への招待を申し出たが、それもトカゲが断るのを見越しての方便だった。

ピャフィフィの家はさほど豊かではなく、かといって決して格下でもない。中堅の客を押さえ  
ながらも、異人遊女と西州芸能を専門とすることで、地元の裕福な馴染みを持ち続けていた。だ  
から月に数度は、遊女達に休日と豪華な食事が用意される。褐色の柱と紺の塗り壁からなる家は  
カントウヤの樹皮葺き屋根を持ち、その下で異人娘らは残りの人生を送った。

早朝、泊まりの客らを送り出し、女主人は隣にのんどりと立つ石花娘を顔の側まで屈ませた。  
「お前もここに来て十年になる。お前の舞は随分稼いでくれたし、部屋をやってもいいかもしれ  
ない」

「着物も自分で買わなきゃいけない？」

「今まで買ってやったものは、みんなお前さんの借金になってるだけだよ。この家で年をとるつ  
もりなら、かまやしないが。ところで石花はどれくらい生きるんだろうね。あたしの仔猫ちゃ  
んは、十五年で先に逝ってしまったよ。飯炊きの婆さんもこの間逝ったが、まだ二十才だった。  
異人はどうにも短命だね。人間と同じくらいなのは、あの角付きの子達らだけだ」

ピャフィフィは腕にはめたワルバをしゃんと鳴らす。形見となったその鈴を、彼女は肌身離さ  
ない。石花娘はにこりともせず、自分のワルバを震わせた。

「義母さんより遥かに生きるわ」

「あたしはもう、いつどうなってもおかしくない。いよいよとなればこの家はユイシに任せるつ  
もりでいるから、お前もよく手伝っておくれよ」

「その話はもう、何百ぺんか聞いたわ。この五、六年間」

「どこにも行く気はないんだね」

「どこに行けばいいものやら。異人は誰かの財産でなきゃ生きられない。分かったのはそれだけ  
」

「クルートドゥルーの詩人達に耳を傾けりゃ、居ながらにして世界のどこへだって飛べるさ」

石花娘は大きなあくびを一つ飲むと、他の遊女達と共に家の中へ戻る。これから昼まで一眠  
りし、それから芸の稽古をこなして夕の舞台へ出ねばならない。

セゲアテルの花街は見事なカントウヤ建築が多いと有名だが、中央茶屋は都王の宮殿にも負け  
ない豪華さだ。カントウヤの柱は金箔銀箔で覆われ、壁面には東西からあまねく集めた様々な顔  
料で彩色されている。中に灯りをいれた球状の提灯は辰砂の赤に染まり、延々と続く雲母の真珠  
色の編み模様にも包まれ、風に回る。大宴会場は四階分の吹き抜けで、頭上には白く塗られたカ  
ントウヤの梁が幾重にも渡されている。その梁の上をさながら天空の精霊達のように、遊女や酒  
壺を手にする子どもらが渡った。金色の円舞台は中央にあり、演目は全方位を意識して行われる  
。唯一死角となるのは控えの間が設えられている部分だが、薄い紗で幾重にも覆い、月にかかる  
雲を摸していた。

日が傾きかける頃、使い走りの子どもや若者らが辻を走り回って道のかしこに小さな香炉と明  
かりを置いて行く。格下の遊女らは口に草笛を模した翡翠の笛をくわえ、花街の大門が開く知ら

せを出す。客の多くは旅商人とその従者や人夫だ。彼らはそれぞれの格に応じた茶屋や遊女の家  
に散って行く。人夫などは、物悲しい笛の音を追って街の裏手へ姿を消す。中央茶屋へ入ること  
ができるのは、それなりの金を払える者達だけである。大宴会場へ通される客もいれば、上階の  
部屋を取り、直接芸妓を呼ぶ裕福な馴染客もいる。

「お客が来たよ。そろそろ梁に上がんな」

使い走りが控えにたむろする遊女らに声をかける。石花娘が一番に三階の梁を目指す。単純に  
高いところが好きなのと、三階回廊は特別に許された旅芸人達の控えがあり、彼らから様々な話  
を聞けるためだ。石花娘を追って、同じ心積もりの異人遊女が続いた。

廊下には料理の盆を持つ召使が行き交っている。外から次々と今夜の料理が届くのだ。東西様  
々な国の料理は、天空の道で新たな趣向を生み出す。大宴会場では今にも、白銀の皿と椀が幾重  
にも重ねられ、果物と花を盛った塔が建てられようとしている。梁から見下ろすと、大輪の菊、  
それも花卉一枚ずつが異なる色合いにそまった幻影の花のようである。

「本物のしょうげ梢華って、見たことある？」

梁の両脇には、金糸を織り込んだ絹の綱が張られている。胸の前に綱を握り、梁に腰掛けな  
がら、獣の尾を持つ遊女が石花娘を振り返る。石花娘はその後ろを渡って、隣に座る。長すぎる  
足を宙に降ろし、足首のワルバを鳴らした。

「クルートドゥルーの詩人と一緒。この世には咲かない花よ。あの人達も、この世では歌わない  
と言うじゃない」

「でも、梢華と呼ばれたい。この世の梢華はすごく綺麗なもの」

石花娘の後ろをすり抜けて、柔らかな灰色の和毛に覆われた娘が隣に座る。セゲアテルの遊女  
には虫や花の名を持つ階級があるが、梢華はその最高位だった。その位を持つ遊女は、このセゲ  
アテルでさえようやく一人いるだけだ。

「今日は梢華の御方はこないでしょう。明日は都王がクルートドゥルーの詩人達を連れてくる  
から、あの方もきっと呼ばれる」

「今日は前夜祭か」

「前夜祭にしか出られない人も多いただろうけど。私達も明日は家でお休みね」

「義母さんは文句を言ってたけど」

「でも都王が玉代を出してくれるんでしょう」

「西州音楽を披露できないのが悔しいのよ」

三人が足をぶらぶらさせていると、階下の渡り廊下を芸者らが渡って行く。そのうちの旅芸人  
達が、石花娘の長い足に目を留めて立ち止まった。小太りの老人と三人の若者で、みな笛や豎琴  
の楽器を手にしている。

「これはまた随分不思議ですな。三者三様のお足だが、わしが普段見慣れているような足はない  
」

「見慣れてるって、嘘ばかり」

銀猫娘が片足をぽーんと上げると、老人は大きく笑う。

「これでも息子を三人持つ身です」

「足はいいから、何か演奏しながら歌ってよ。あの、吟遊詩人とかいうのみたいに」

「そうね。お客もこっちを見てる。後で降りて行って、たくさんご祝儀貰うといいわ」

石花娘と長い尾の娘が急かす。明日ここに顔を出せないなら、流れの芸人達の一風変わった見せ物を十分楽しめない。老人は意を汲んで、手に持つ長首の擦弦楽器を構え、息子達を振り返った。

素晴らしい茎が 天から地へ伸びてござる  
その先に 綺麗な絹の花を咲かせて  
私のおつむの上 双子の花が揺れていら  
これはこれは なんと素敵な三人娘さん  
かわいい六本の足で 年寄りをからかうのはおやめ

父親の誘いに答えて、前に出た長男が太鼓を打ち鳴らす。

水芭蕉のお耳を持つ 銀天鷲絨の娘さん  
その柔らかな毛並みは  
神が与えたもうた優美の証  
でも 気をお付け  
その毛並みの中の住人が  
跳ねた先でお客様に噛み付かぬよう

長男を真似、次男がおどけた様子で笛を吹く。しかし彼は歌おうにも歌えない。すぐに真ん中を末息子に譲る。

指先に金の欠け月挿した 幸運な娘さん  
その硝子の瞳は謎めいて  
誰しも捉えることはかなわない  
さあ 押さえておきなさい  
主人の瞳より正直なその尾っぽ  
お客様の顔を赤や青に染めぬよう

末息子は豎琴をかき鳴らし、再び次男に場所を譲る。彼はようやく口から笛を離し、両手を打った。

ミルクから彫り出された 純白の娘さん  
あなたの頭を飾る御髪は  
まさに神を現す後光のよう

もし 私の願いが叶うなら  
その輝きよ 太陽を超えよ  
あなたのお顔が見えなくなるほどに

次男がひっこむ。腕を組んでしまった三人娘をなだめるように、老人が中央に戻る。

なんとも素敵な三人娘さん  
巧みは 舞い踊り人の心を捉える極み  
されどあなた方の心は  
琴の音のみぞ知る

演奏が終わると、階下から笑いと拍手がわいた。

「それでは、ご祝儀を集めに参りましょう」

旅芸人の親子は挨拶して立ち去った。まもなく石花娘は絹の履物を脱ぎ、梁から渡り廊下へ飛び降りる。そこからさらに別の梁へと移って、舞台の上へ着地した。そろそろ宴が始まるうという時、人々は期待に包まれている。

天の止まり木から淡い金の紗と共に降りたのは、白く丈高い異人女。彼女は手にした絹の履物を舞台の外へ投げる。顔からつま先まで、全身金銀朱で文様を描いているのは、身体の傷痕を隠すためでもある。腹の前に太鼓を下げた芸妓らが控えの雲からわらわら現れ、ばちを頭上で高らかに打ち合わせる。それを合図に、異人の乱舞がはじまった。

舞手は空から降った銀のばちを両手で受ける。舞い降りる金の紗をばちで受け、舞手はとんぼ返りをうった。銀のばちは金の紗を絡め、白い足先は大きな半円弧を描く。砂漠に落ちる激しく荒々しい陽光だ。生来身に受けた石花の舞踏と西州の舞を、ピヤフィフィの才能が結びつけ、新たに生み出した舞である。

十連の太鼓に、長尾娘の弾く琴が加わった。彼女の金に塗った十本の指が弦の上を一度走り、尾の先に留めた銅の指輪が小さな鐘を打った。

琴と鐘の鋭い一瞬に、石花娘は静止する。蒼白の肌は上気して、今や真珠の光に煙っている。唇には血管の赤みが滲んでいた。頬に金の涙が流れたのは、汗に溶けた目元の化粧である。伸ばした腕は微動だにせず、ただ肩と胸元が呼吸に合わせて柔らかに上下する。

梁の上で、銀猫娘の横笛がはじまった。琴の音がそれに重なり、緩やかな西州の旋律が紡がれる。石花娘の腕が静かに動く。手首をひねり、閉じた指先が開いた。梢華を模した舞は厳かに、静を要と舞手の姿態に現れる。西州にてはじめて見出されたこの幻影の花は、この世に存在せず、人の胸で美と歓喜の内に花卉を開く。

石花娘が舞台を降りると、星の数ものワルバが鳴った。花街で芸妓の修練を積む少年少女らが総出で客の席の間を駆け巡り、あちらこちらで遊女と客のやり取りを真似た他愛ない寸劇を披露する。茶番が一区切りすると彼らの手足に下がるワルバは一瞬息を潜め、すぐに来たとき同様わっとさんざめいて奥へ消えた。その間に中央の舞台は、次の見世物に様相を着替えている。

「さて、お客に呼ばれた者は、行っておいで。そうでないなら、もう一回梁の上だよ」

ピャフィフィがお抱え遊女らを急かすと、十者十様の姿を持つ娘達は、梁への階段をそぞろ歩く。ピャフィフィは呆れて声をあげた。

「どうしたことだろう！ 家には今夜のお客様をもてなす用意だってしてあるのに」

「義母さん、トカゲを呼んであげるといいわ」

「あれが来るもんかね。こんな華やかな晩に。注文した料理が無駄になっちゃう」

梁の上へ戻ると、娘達はまた宙に両足を投げ出す。階下の賑わいはたけなわで、吹き抜け周りに設えられた裕福な客達のための間も、高級芸妓らがひっきりなしに回って明るい。馴染みの遊女の家へ場所を変える客達の姿も目立ちはじめている。

「トカゲは相変わらずあの暗い部屋で、薬草を練り合わせてるか人売りと会っているかのどちらかだろうねえ」

長尾娘は尾の先のワルバを気だるげに鳴らした。異人娘達にとって、トカゲは病に倒れたとき唯一頼みになる恩人でもあるが、それ以上彼を知る者は一人としていなかった。

「修業僧だって、あれほど慎ましい暮らしはしていないでしょうね。すぐ近くにこんな場所があるので遊びもせず、首輪付きの異人に養い主人を見つけて病気も診て、こつこつ徳を積んでるんだから」

「まるで改心した大悪党みたいに、ね」

銀猫娘は首を掻き、被毛の間からつまみ出したものを梁の裏側で押し潰した。

「私、本当にまたノミを移されたみたい。ダニもいる。随分血を吸われたわ」

「前みたいにあちこち毛が禿げたら、当分お客の前には出られないよ」

異人娘達の軽口を隣に、石花娘はじっと階下を見下ろしていた。実際トカゲが明るい場所や人前に出るのを嫌がるのも、いつも鼻まで顔を覆いフードを目深に被っているのも、自分が石花だと知られたくないからだ。最近はしわがれ声まで作っているが、どうやらそれも年をとったと見せかける芝居らしい。石花は人間の倍は長命であるから、トカゲもまだ老人というほどの年齢にはなっていないはずだ。

「今夜はお客が来ないかもしれないから、今からひとつ走り、トカゲにノミ取りの薬をもらってきてあげる」

石花娘は呟いて、煌々と輝く茶屋を後にする。彼女が踊り子衣装のまま通りを疾駆すると、中央茶屋に入れず賑わいだけを楽しんでいた客や、料理屋の使い走り達がはやし立てた。

花街の大門近くにあるトカゲの診療所境界も今夜は華やいだ装飾がされていたが、一步裏の小径に入れば夜の闇がある。診療所の扉を開けると、部屋の奥にいたトカゲは目に見えて肩をびくつかせた。

「こんな時間になんだ」

机の上で短い蠟燭が小さくはぜた。彼の姿はその明かりと窓辺から滲む宵の光の狭間にあり、落ち着きがない。夜気は湿った床の上を流れ、微かな霧となっている。

「うちの猫娘に薬をもらおうと思って」

トカゲは薬箱に寄り、彼女に対しては隠す正体もないので、ごちゃついた箱の中へ石花の魔法

の明かりを灯した。ただ、それはあまりに投げやりな態度でもあった。

「ばれないよう、用心しているものかと思ったけど」

「クルートドゥルーの詩人の目は、欺けない」

相変わらずそわそわしながら、トカゲは石花娘に薬を投げた。

「俺が石花だとばれれば、都王が捕らえにくるだろう。お前がどんなに俺の正体を声高に叫んだところで信じる者はいないが、奴の言葉は違う」

「詩人はもうここに来てるの？」

「花街の堀も堀も詩人どもを前にすれば、水晶の道と梢華の生垣とやらになるらしい。連中は、隠し事を持つ者を言葉一つで丸裸にする。都王が奴らを招くのは、都の富に関わる者を選別するためだ」

彼は再び窓辺に寄り、素早く外を伺った。

「俺は半世紀前、あの崖を登って天空の道へ落ちた。下される罰を恐れて逃れたが、結局ここではいくつもの隠し事をせねばならなくなった」

「でもばれたって、人買だけをやめたら済むんじゃないの？ 花街の異人娘を診れるのはあなただけだ」

トカゲは無造作に扉を閉めた。カントゥヤの鎧戸がカラカラと明るく響く。花街の窓や扉は、動かせば音が鳴る仕掛けが施されていた。さらに彼は顔を覆う布も外す。蠟燭の灯りに影ばかりを落とす、瘦せて疲れた表情が現れる。その瞳の色が孔雀石よりも鮮やかな緑色であったのを、石花娘は知っていた。

「クルートドゥルーの詩人のうち、不吉な歌とともに戻って来た者がいる。聞いているか」

「この界限には、不吉なものはきれいに隠されている」

「そうかもしれん。だからエツベルは都王の怒りをかって、一人だけ城の中に閉じ込められている。エツベルは見通しすぎる。天空の道の末まで見た。クルートドゥルーの幻影に飲まれると」

トカゲは素早く椅子に腰かけ、指を組んで背を丸める。長く節くれた指と瘦せた風貌、神経質なほど鋭い身のこなしからくる渾名だが、近年は老衰の芝居が加わり、トカゲどころか幽鬼に似てきている。

石花娘は机に寄った。蠟燭の灯りに、肌を覆う文様がきらめく。

「それより、あなたには自分の正体以外にも隠していることが？」

「俺はお前が誰だったか、知っているぞ」

トカゲは忌々しげに石花娘の文様に目をやる。

「石花で髪色を抜く者は神職にある者だけだ。お前が神殿の巫女であったのは、一目見てすぐに分かった。花街にすぐ馴染んだのは、生贄の祭壇近くに仕える身だったからだろう。もう少し、観念するまでに厄介があると踏んでいたものだが。身を差し出す生業にすでに慣れていたわけだ」

「巫女は自分の生業を放棄するだけで、死に当たる罪になる。でも、祭壇に上げられる者を送るのに、いい加減嫌気がさした」

「祭壇の巫女は短命なほどいい。長生きしすぎて、仲間を送りすぎたな。だがこの花街での暮らしも、石花には少々長すぎる。逃げられるなら、逃げた方がいい。この都もじき滅びるのだから。エツベルなら、うまい具合に抜け出す知恵を持っているだろう。花街の塀より、都を囲う塀の方が高い」

「あなたは……」

「俺が誰だったかなんぞ、どうでもいい！ 崖を越える前とここで、何も変わらない。石花に生まれながら、魔力に乏しいことがすでに罪だった。なのにここではやはり魔力を持ちすぎて、土地に身体が馴染まない。お前に飲ませている水も、俺が飲んでいる水も、黒水に侵された仲間の成れの果てだ。魔力の薄い土地で石花が生きるには、魔力を持つ水を身体に入れねばならん。魔力の濃い土地で、魔力に乏しい者が身を保つのに必要だ」

トカゲは石花娘の身体を乱暴に押し退け、無理やり立ち上がる。彼はひどく疲れきっていた。小娘一人の身体も十分に押し切れず、彼が立ち上がるために石花娘の方が少し身体を引いてやらなければならなかった。

「私はもう、あの水は飲まない」

「それもいい。俺は逃げるのにも隠れるのにも、水を飲むのにも生きるのにも飽いた。医術を学んだのは己自身が生きるためだった。黒水になると身体のどの部分が最初に溶け出すのか。最後に残るのはどの部分か。遺骸の解剖も観察も禁じられていたから、盗むしかなかった。俺の場合は、飲むために必要だったのもあるが」

「水を飲まないとうなる？」

「衰弱して死ぬだけだ。これを受け入れるまでに、どれほど……」

トカゲは奥の部屋へ入り、櫃の乗った台車を押して来た。

「エツベルに会ってみたいなら、今夜でも構わんぞ。ただしお前は梢華の垣根の中で、向こうはカントウヤの壁の向こうだ。垣根を越えるのは造作ない。昨日一人死んだから、この娘と暫く一緒に入ってくれりゃいいだけだ」

やや怯んだ石花娘の手から、彼は薬をもぎ取った。

「これは明日にでもピャフィフィの家に届けさせる。俺もさすがに明日明後日の命ではないだろう」

顔に布を巻き、トカゲは石花娘を促した。まるでほんの少しの散歩を勧めるように、緊迫も恐れもなく。この脱走が見つかれば、石花娘よりトカゲの方が困ったことになるだろう。クルートドゥルーの詩人がセゲアテルに現れて彼をどう脅かしたかは知れないが、彼はすでに自身の命にも執着を見せなかった。

櫃の中には小さな羊角の娘が病に果てた身体を丸めて眠っていた。石花娘は羊娘を抱くように長い身体を丸めて櫃にそわせる。

「これは身体が小さすぎたから、長くは持たんと思っていた」

トカゲは陰気に呟いて、櫃の蓋を閉じる。石花娘は香の甘い香りが染みた子どもを抱いて、運ばれる間じっとしていた。エツベルに会う気はさほどなかったが、花街に残る気も薄かった。世話になったピャフィフィに対しては後ろめたさを感じていた。それでもいつか花街より出なければ

ばならないのは、トカゲが言うように真実だったかもしれない。

外に出るよう促され、石花娘は櫃から身体を起こす。カントウヤの長屋がひしめく路地の先に、都王の宮殿が見える。庭園にはカントウヤの若木が植えられ、すでにその丈は五層からなる宮殿の中ほどまで達し、伸ばした枝葉は淡い陰の雲海となっている。雲海の中には小さなランプが飾られ、星々とともに輝いている。

櫃から降りると、西の方が明るい。それは花街の灯りで、都は灯りに照らされながらまどろんでいた。

「行ってみるといい。クルートドゥルーの詩人のなかでも、エツベルは異色だ。噂が本当なら、あの詩人は一睡の代わりに物語を紡ぐのだ。そして時に、人の胸に隠された言葉を暴く。思い出さぬよう深くうずめていたとしても、見通される」

トカゲは櫃の蓋を閉め、間口のひとつへ入っていった。石花娘の前で木鈴を下げた扉が閉まり、小さく乾いた音が転がった。花街に勤める者は、家の扉にも鳴子を付けている。

通りは人の気配ひとつなく、石花娘は白い両足で伸びやかに歩いた。花街から逃げた身であることは、心に薄い。束の間の夢を歩くがごとく、彼女は崖を越えて以来の孤独をしばし楽しんだ。行くあてがないから宮殿を目指す、やがて群青の城壁で立ち止まる。

石花娘は藍の礫に飾られた壁沿いに進む。次に行き当たったのは銀の水面を持つ堀である。夜半は過ぎ、月の端が山間に覗いている。彼女はゆっくりと頭上を見上げ、空にかかるカントウヤの枝葉に目を留める。耳を澄ますと、葉を通る風に微かな旋律が絡んでいた。滑らかな音色はカントウヤの枝から彫り出された縦笛にも似て、途切れることなく続いている。石花娘は暫く音色に耳を傾け、やがて静かに堀の水へ身体を沈めた。

「なぜ門兵達は、お前を止めなかったのだろうね。私は彼らを罰しなければならないね」

石花娘は茂みの影で目を覚ます。稜線から七色に滲む光が差していた。朝日を背に立つ詩人は、通り過ぎざま声をかけたらしい。咎めの言葉とは裏腹に、彼女を気に留めることなく歩を進めて、カントウヤの瘤に腰掛ける。

石花娘は茂みの傍へ膝をついた。堀から上がり、そこで門兵に姿を見られたが、庭園に逃げ込んでも追っ手は現れなかった。それでも用心のためにしばらく隠れるうち、音色に眠気を誘われたのだ。目覚めると旋律は消え、一人の詩人に姿を変えている。

それは驚くほど美しい顔立ちのなよやかな若者で、両目を刺繍の入った細布で巻いて隠している。富貴の者にしか手に入れられぬ紫紺の長衣をまとい、緩く波打つ黒髪が両肩へ落ちていた。それほど優雅な姿でいるのに、左の腕にある豎琴は、あまりにみすぼらしい。舟形に荒く削り出されたわずか五弦のそれは、仕上げの塗装がなされたあとも見えず、装飾のひとつもない。

「衛兵らは罰せられるのですか」

石花娘はおろおろと問うた。詩人は柔らかに頬を緩める。澄んでいながらも厚みのある、艶やかな心地よい声が返ってきた。

「そうだね。彼らは自分の役目を怠ったのだから。だが、もしお前が目も眩むほどに美しい娘だったなら、彼らが自分の役目を忘れても仕方がなかっただろう」

石花娘はつと顔を伏せて、しばし思いをめぐらせた。わずかの間の後に、彼女は勢い込んで答えた。

「旦那様、私は美しくはありませんが、目も眩むほど肌が白いのです」

言葉通り、堀で泳ぐうち、身体に描いていた文様は溶けて消えていた。今は細い胸飾りと腰帯が身体を覆うのみである。

「お前が美しくないかどうかは、私がこの指でお前の顔を触ればおおよそ分かるものの、白いは厄介だ。目の見えぬこの私に、お前はどのようにしてその肌の白さを証明できる？」

石花娘は宙を見上げて再び考えた。

「ええと、旦那様が一番信用なさっている人を、お呼びください。もちろん、その人は目が見えなくてはなりません。その人に、私の肌が白いかと尋ねてください」

詩人はこれを聞くと、彼女にすつと横顔を見せ、高い音の口笛を吹いた。すぐに、高い子どもの声がこれに答え、庭園の奥から八つ程度の少女が姿を現す。金色の巻き毛から小さな角が生えている、異人奴隷だ。子どもは詩人に走り寄って、その腕にそっと優しく触れた。

「お呼びでしょうか」

「ああ。ところでお前は今まで何をしていたのかね？」

「庭園の隅に咲いていた野菊を、いくらか摘んでおりました。エツベル様に、お贈りしようと思ひまして。とても良い香りがいたします」

詩人は、子どもの小さな手から野菊の束を受け取った。

「お前にひとつ尋ねたいことがあるんだよ」

「はい。お答えします」

子どもは従順に答える。詩人は石花娘へと顔を向ける。少女もそれにつられて、きらきらした瞳で彼女を見つめた。

「あそこにいる娘。あの娘の肌は、目も眩むほどに白いかね？」

少女は石花娘の全身に目を走らせる。しばらくしてあっけないほど簡潔に、子どもは短く答えた。

「いいえ」

石花娘は息を飲む。彼女は少女を、激しい恨みを持って鋭く睨みつけた。

「嘘つき！」

少女は石花娘の視線に、身じろぎもしない。一切の感情も感じさせない大きな灰色の瞳で、彼女を見返すだけだ。

「その子は、あなたに嘘をついています！」

石花娘は詩人に叫んだが、詩人は冷酷に微笑み続ける。

「そうは言っても、この子は私よりも信用している家臣なのだ。そもそも、お前が私にそうしろと言ったのだよ。だからこれがまぎれもない答えなのだ。だが、あせるな。この子はまだ最後まで、私の問いには答えていないのだから」

詩人は子どもの背中に腕を回して、優しく続きを促した。少女は石花娘の身体を見据えたまま、こう続けた。

「娘の顔、両肩、両胸、そして両腿は朝日の金色です。両腕と両の脛の上半分は沼のように黒ずんだ紫。両の脛の下半分は、灰緑。腹は霧色と淡い金が入り混じっています。首は上半分が深い紺、下半分が淡い銀色。以上でございます、ご主人様」

詩人は軽く頷き、石花娘を見返す仕草をして見せる。

「どうだろうか。この子はこれでもまだ、嘘をついていると言えるだろうか」

石花娘は少女の言ったことが本当かどうか、自分の身体を見回した。そして、あの少女は彼女にとって不服と言えるくらいに、正直すぎると思った。

「分かりました、旦那様。それでその子の答えを聞いて、あなた様は私の肌が何色だと思われましたか？ 私の肌は場所によって様々な色を持って、蛇の皮みたいに斑だとお考えになりましたか？」

詩人は軽くうつむき、低く笑い声をたてた。

「私はお前の肌を、純白だと思う。お前の肌はこの夜明けと庭園の色を、混じり気なしに全てきれいに映しているのだから。しかし私が不思議でならないのは……」

詩人は、身体に巻いていた長衣に片手をかける。

「お前がどうやら裸でいるらしいということだよ。夏は遠い。この季節ではまだ寒だろう」

金髪の少女は詩人から長衣を受け取り、石花娘の前へと小走りに駆け寄ってきた。しかし石花娘はすっと立ち、少女が彼女の肩にマントをかけるのを阻んだ。主の命を果たせなかった賢い子どもは、石花娘を上目遣いに小さな口を尖らせる。石花娘はそれには構わなかった。

「旦那様、あなたは何でもご存知だと聞きました。それ故に、花街の異人娘達を診る医師をすっ

かり怯えさせてしまった。彼の隠された秘密を、どうか誰にも暴かないと誓って欲しい」

詩人は僅かに顎を上げ、石花娘の声に聞き入った。口元に表情はなく、明けゆく日の光を頬に受け、そちらに少し顔を傾けた。

「ああ、トカゲか。私の口から暴かれることはないが、秘密の方がやがて自ら明るみになるだろう」

石花娘はこちらに伸ばされた手をとった。詩人らしい細く長い指は、爪の先が朱に染められている。詩人は立ち上がり、庭園の奥へと促した。

「自らって、どういうことなのです」

「歌って差し上げたいが、私は日のあろう場所では歌わぬ。彼は都の地下に、黒水を隠している。お前がトカゲからもらう水は、黒水とカントウヤの樹液、カントウヤの根の間にろ過された地下水の混ぜ物だ。黒水にかかった石花は、すぐには死なぬ。だが、黒水が人間には猛毒であるために、病に倒れた石花はすぐにでも黒い森の奥深くに埋めねばならないのだ。黒水はカントウヤだけが真水に変えることができる故。それをトカゲはしなかった。彼は十数年前、黒水の出た屋敷へ赴き、一人の石花を連れてセゲアテルへ戻ってきたが、黒い森へは行かず、その石花を都の地下に置いて看病した。溶ける身体から染み出す黒水は石花自身とトカゲを生かした。その石花が儂くなったのは数日前だ。トカゲは悲しんだかもしれない。悲しみのせいだったのかもしれない。いずれにしても彼は遺体を少し、辺りの土へこぼしてしまった。黒水は地下水に混じって黒い森を呼ぶ。ただ幸いにして、都はカントウヤの船だ」

「なぜトカゲのことを、そこまで知っているのですか」

「私は物語を見逃さない」

庭園の奥は暗く、朝の冷たい陽光は頭上の葉でとどめられていた。湿った土とカントウヤの芳香が風に満ち、詩人はそこで立ち止まった。

「クルートドゥルーの詩人の中で、私は最もつまらぬ者に過ぎない。その昔、私はこの都に姫として生まれた。ところが長じて人の妻になるを拒んだ為に、怒った都王は私の髪を切り、目を抜き、胸を切り落とした。女である必要はないとな。その後ようやく私は自由になって、漂泊の身を得た」

詩人は粗末な豎琴を爪弾く。弦は豎琴の首に巻き付けられて止まっているだけで、まともな調弦ができるかどうかも怪しい。音色は響きに乏しく、乾いている。ある種の趣があるかも知れないが、それは人がまだこの世に現れて間もない、太古への夢想を誘うにとどまるだろう。

石花娘は足元に跪く。

「あなたはご自分のことをつまらぬと言うけれど、人はあなたの歌を最高だと崇めるし、何でも知っているかと恐れている。人の胸の内にあるものも暴くと」

「内に何かあれば。けどお前は空っぽだね。私と同じだ。希望も絶望も失っている」

「クルートドゥルーの詩人とは、何者なのですか。私は人間の都に住んで十年近くになるのに、ときには自分でも言葉にするのに、本当は何も知らない。誰に聞いても、詩人は詩人だと言う。ならば、クルートドゥルーとは何なのでしょう」

「幻影の国」

エツベルは両目の覆いを解き、虚ろな眼窩をカントウヤの天蓋へ向けた。

「遙か昔、龍翼山地の高原に、それは存在した。紺碧の湖に築かれた、塩のレンガからなる純白の都。王の抱える詩人らは随一の才を持ち、都の栄華を歌った。その隆盛を極めた後、全ての詩は歌い尽くされた。詩人達は王や都人らの墮落を歌いはじめる。塩の都も溶けはじめた。湖へ没する都に、船上の王は詩人らだけを取り残す。クルートドゥルーの都は、クルートドゥルーの詩人と共にこの世から消えた。都から去った王と都人は彼らの亡霊に襲われ、楽を手にとり流謫の身となって、さすらい続けることとなった。クルートドゥルーの流れを汲む一流の技を持ち、彼らの末裔を名乗る者はクルートドゥルーの詩人と呼ばれる。私は違う。だが幻影の国に生きた詩人のように、天空の道の栄華を歌い、今では滅亡を歌う。だから人は私もクルートドゥルーの詩人と呼ぶ」

落ち窪んだ瞼の隙間が僅かに震え、エツベルは眼帯を巻いた。長衣を持って余していた少女は、ようやく石花娘の肩にそれを掛ける。役目を終えた少女は、すぐにエツベルの側へ戻った。

「朝だ。私は十分眠った」

少女に手を引かれ、エツベルは来た道に戻ろうとする。石花娘は素早くその腕に指を添えた。詩人は瞬時に身を硬くし、立ち止まる。

「少々の朝寝もよいでしょう。太陽がお嫌いなら、庭園のさらに奥深くへご案内します。どうか私をこの都から出してください。ウワカンの太守の元から、逃げ出されたときみたいに」

「そういえば、逃げるときにこの子の力を借りたよ。賢い子だから。戻らぬというから、連れてくる。お前は別の道で生きるあてが？」

「少なくとも、今の道はもう先がありません」

「.....多くの者が天空の道より去らねばならぬ。クルートドゥルーは過去の時から現れ、ふり返る者を飲み尽くすだろう。行く者は新たな詩人となる。カントウヤの根は大地を砕き山を没するが、今度は水が人々を救うだろう。都はカントウヤの巨船だ」

詩人は粗末な豎琴を差し出す。

「私は黒い森の奥で、これに出会った。血にまみれた花嫁衣裳でさまよううち、獣が戯れに奏でるこれを大木の根に探り当てた。そばには苔生した頭蓋があり、それは風と豎琴の音のうちにクルートドゥルーの詩人の姿を胸の奥へ映した。私はそこでクルートドゥルーの技巧を学び、傷が癒えると豎琴を持って旅立った。聞こえるか。この豎琴はあらゆる詩を囁く」

豎琴を前に、戸惑う石花娘は首を振る。彼女はワルバしか奏でるものを知らなかった。

「私は踊るだけです。豎琴もどう弾けばよいのでしょうか」

「大都セゲアテルにはあらゆる歌が集まり、多くは花街で歌われる。酒宴の席において、寝屋において、あるいは日々の所作において。この豎琴に知らぬ歌はない。お前も知らぬ歌の方が少ないはずだ」

「私はたくさんの歌を聞きました。クルートドゥルーの詩人の歌以外は」

すると詩人は自ら豎琴を構え、ゆったりと歩みながら低い声で歌った。

百の王国がそれを繋ぐ  
あたかも玉飾りのごとく  
玉飾りのごとく

その玉の彩りは  
富と繁栄  
美と叡智  
それら天空の道に極まり

その玉の彩りは  
貧と墮落  
醜と暗愚  
それら天空の道に極まり

天空の道  
百の記憶がそれを繋ぐ  
あたかも幻影のごとく  
幻影のごとく

エツベルの歌声を耳にいれるのは、清らかな水で渴いた喉を潤すことに似ている。豎琴の奏でる旋律が途絶えると、野ばらの先に宮殿の門が姿を現す。最後に一音、強く弦が弾かれた。門衛は厳しい面持ちで、手にした錫を振って応える。

「クルートドゥルーの詩人よ。まだそのような歌を唄うか。都王はお主を宮殿から出さぬようにとお命じだ。庭園に戻られよ」

「クルートドゥルーの詩人がひとつ所に留まらぬのは、己の足元から沈まぬためだ。留まると水に没する。飛ぶ鳥が羽を休めないのと同じでね。宮殿を沈めたくはないのだよ」

「クルートドゥルーの詩人は黒水も呼ぶのか」

エツベルの冗談を門衛はまともに捉える。しかしそれには理由があった。門衛は石花娘を見やると、錫の先で閉ざされた門を強く叩く。

「クルートドゥルーの詩人よ。市で黒水が出たぞ。お前がこの都に留まっているからか？ それとも不吉な歌のせいかな？」

エツベルは答えず、少女に手を引かれ、石花娘を伴って開いた門から宮殿を去った。

夜明けの都は花街の眠りと入れ替わり、夜の灯りを消し歩く街灯番の手押し車が軋みながら過ぎていく。通りはいつもなら、店をやる者達が朝の仕入れに行き交うが、今朝は皆がおろおろと惑い、互いに不安な額を突き合わせている。エツベルの姿が現れると、人々は幻影の詩人の後ろにつく。

「私の小間使いでは少々足が遅い。人の噂に出遅れたようだ。お前がトカゲの自宅まで手を引い

てくれ」

石花娘はエツベルの腕をとり、少女を背におぶって駆け出した。エツベルは駆けることを恐れなかった。傷ひとつない頬は、朝焼けに染まっている。詩人にとってその両頬が陽射しの方向を知る目であり、歌はあらゆる場所と時に触れる手である。エツベルは、滅びによって繋がるクルートドゥルーの幻影から射し込む斜陽を受け、歌でもってそれを知った。滅びのはじまりは、まさにこの都の市にあったからこそ、ウワカンの太守以上に怒りをかったセゲアテルの都王の元へ戻ったのだった。

人々が遠巻きに囲う中、トカゲは大きな甕の側に立っていた。戸口の外には昨晚の荷車があり、彼は甕を載せようとしていた。石花娘がエツベルを連れて人の間に立つと、周りの者達は息を呑んで散る。

「まさか、この女も黒水か」

その囁きを鋭く聞きつけ、トカゲは笑う。

「呑気なもんだ。黒水が出たのにまだこんな所で見物とは」

「井戸を汚したのは貴様だろう！ あれで二人倒れたんだぞ！」

男が怒鳴り返すが、トカゲは意に介さず固定用の縄を手に、ひとり作業を続ける。石花娘は駆け寄った。

「エツベルから聞いた。まさかこの中に黒水で死んだ人がいるの？」

トカゲはちらともちらに顔を上げなかったが、暗い声で呟く。

「俺達を今まで生かしてくれていた人だ。だが死後の融解が早すぎた。土地のせいだ。蓋は開けるな。カントウヤの樹液も注いでいるが、それでも気化しやすい。これ以上黒水を撒き散らせば都は終わる。人が最初に死んで、黒水を求めるカントウヤの根が都の土台を裂き砕く。最後に水が全てを洗い流すが、その水は塩辛いらしい」

見れば甕の蓋は蟻で密閉されている。石花娘が見守る中、甕は荷台に固定された。トカゲはうっそりと <sup>ながえ</sup> 轆 の間に立つ。彼が重い足取りで進み出すと、徐々に密度を増していた人の輪も恐れでばらけた。少女に手を引かれたエツベルが片手を出して轆に触れた。トカゲは前を見据えたまま、陰気な薄笑いを浮かべる。

「両目を抜かれた小娘が、クルートドゥルーの幻影に囚われるとは。都王は目などではなく声を封じるべきだった。避けられん滅びを予言して何になる」

「人も年を取れば、身仕舞いが必要になるときを悟るではないか。都もそうだ。私も早急に必要だね。受け取ってくれ。これは私だけの持ち物ではないのだから」

詩人は豎琴を後ろへ放る。慌てた石花娘がそれを受け止めた刹那、矢が詩人の背に吸い込まれた。よろめいた詩人は荷台に倒れこむ。トカゲはやはり前を向いたまま、「おい」と石花娘に怒鳴った。荷車の後ろには、都王の輿と衛士の群れが見える。

「こいつは助からん。都王はそのつもりだ。脇に退けてくれ。俺達は都を去るんだ。立ち止まれば射抜かれるぞ」

しかし石花娘がそうするまでもなく、エツベルは自ら荷台から上半身を起こし、脇へ下がった。顔から血の気は失せていたものの、口元は微笑み、今にも別の詩を歌い出しそうに見えた。少

女は側について震え、主とともに近づきつつある運命を待っている。トカゲは覆面を地面にかなぐり捨て、再び歩み出した。トカゲを知る近所の者達は彼の正体を見て二度驚いた。ひとつは彼が六十という年齢には見えない、せいぜい四十の容貌であったこと、そしてふたつは、覆面で影となっていた瞳が鮮やかな緑色だったことだ。ただそれよりも、多くの注目を集めたのはクルートドゥルーの詩人だった。

都の門はすでに開かれていた。誰もトカゲと荷車には手を出さない。石花娘も豎琴を抱えたまま後に続き、都を出た。黒い森は一輪草の群れ咲く丘を越えた先に広がっている。ところが二人が門をくぐると、後から都王の衛士達がついて来る。

クルートドゥルーより海満ちる  
カントウヤの森は大地の泉  
カントウヤの都は大地の舟  
小石の如く呑まれるわけにはいかぬ

短い歌が空から聞こえた。石花娘は振り返り、都を守る壁の上からクルートドゥルーの詩人が小間使いと共に突き落とされるのを見る。その伝説からクルートドゥルーの詩人は、墓に葬られることも、都の中で死ぬことも忌まれている。エツベルはまさに、クルートドゥルーの詩人としての最後を迎えた。

丘の道に入ると人の往来はなくなる。衛士らだけがついて来ており、トカゲは舌打ちをして石花娘を呼んだ。

「前を歩け。前を。衛士どもは甕の中身を疑っていやがる」

「見せてやればいいじゃない。そんなに気にしているなら。それで黒水にやられても、自業自得でしょう」

「憐れみをくれてやれ。俺が瀕死のお前を死なせずにおいたのは、そのためだ。お前はもう少しこの世を味わった方がいいと思ったからだ」

「どうして？」

「無知だからだ。さあ、前に行け」

衛士らが不意に歩調を早めた。石花娘は異変を感じて足早に荷車の前へ歩み出る。トカゲが鋭く振り向いた時には、衛士の槍が甕を打っていた。彼らは甕の響きを確かめ、中に液体が入っていることを知る。それでも水ばかりでないことを悟ったらしい。もう一度強く甕を打つ。トカゲが押し殺した声で先頭の衛士に囁く。

「やめろ。人間が黒水に触れると、生きたまま炭になる」

「井戸水を口にした者は？」

「知るか。俺は診ていない。口内と喉、胃の腑から黒水が浸透すれば、症状は重くなるだろうが。黒水は、石花の肉体をこの世に構成せしめる魔性の力が崩れた残骸だ。人間には猛毒だ」

「割るぞ。俺達は確かめねばならん。くだらん芝居で、まんまと逃げ出せはせんぞ」

「せめて黒い森に入ってからにしてくれ。お前達もその方が始末が省けるだろう」

衛士は懐の短刀をトカゲに見せる。トカゲが鼻で笑うと、衛士は短刀をトカゲの懐に移した。

「医者なら、一番早く楽になれる場所を自分で切れるだろう」

「小娘はどうするんだ」

トカゲは呟いた。

石花娘はちらちらと振り返って、二人の会話を耳に入れていた。トカゲの呟きも耳に入るが、その視線から、だめなら諦めろという無言の意味も読み取る。石花娘は豎琴の弦をひとつ強く弾いた。衛士らは一瞬音に驚き、甕に向けた槍を引く。トカゲと先頭の衛士は再び顔を寄せた。

「生涯森の奥から出てこないと誓うなら、逃がしてもいい。だが都王は証拠をお望みだ」

「森で狩りでもして帰れよ」

やがて立ち入った森はカントウヤの古木が目立ち、奥へ行くほど暗い。人間の手で切り倒せるのは、比較的柔かい若い木だけだからだ。森の地面に土はほとんど見えず、年経たカントウヤの根が互いに絡みながらうねっている。苔に湿った根の上は歩きづらい。とうとう荷車は日差しの差し込む最後の場所で止まらざるをえなくなった。トカゲは消耗しきり、ぜいぜいと喘ぎながら短刀で甕を固定する縄を切る。甕は荷台から落ち、根の上に転がった。彼は蠟で封じた蓋に短刀を差し込み甕を開ける。衛士らが遠巻きに見守るなか、甕の口から水が流れ出る。ひとりの衛士が槍を手に、一步踏み込んで甕の中を探る。彼は穂先に引っかかったものを奥に確認すると、すぐに槍ごと捨てて下がる。彼は血の気の失せた顔で、森の奥に立ち尽くす石花娘に向かって声を張り上げる。

「行け！ 永遠に都へ戻ってはならぬ」

石花娘はしばらく放心した。しかしトカゲが逆手に持った短刀を首筋に当て、やがてすすり泣きながら衛士らの手伝いを請う声が聞こえると、暗い森の奥へと姿を隠した。

森の気配は濃く、人間達とひとりの石花の気配はすぐに消えた。

光は遙か頭上の厚い枝葉に遮られ、彼女の目に届くことはなかった。足場は悪く、這い進むのがもっとも安全だった。掌には湿った苔が柔らかい。

時折根の隙間に落ちる足に、触れるものは何もない。まるでとうの昔に地面が洗い流され、カントウヤの根だけが残っているようだった。各巨木がこれだけ密に根と枝葉でつながれば、地面が崩れ落ちようと、水が満ちてこようと、森は沈むことはないだろう。自分がどちらに向かっているか、感覚はすでにない。根の隙間から真下に覗いた時だけ、そこそこに見えるようになった遠い黄緑の光は、植物の類だろうか。若葉を透かす陽光にも似て、瞬きひとつすれば明るい影を残して消えてしまう。そして目を凝らせば、再びかすかに暗がり浮かぶ。めまいを感じて彼女は両目を閉じた。エツベルの長衣に豎琴をくるみ、背にくくりつける。自由になった両手で、先の道を探る。

風は森の上を吹き、葉のざわめきが絶え間ない。動かない森の中はカントウヤの芳香に染まっていたが、鼻はずいぶん前にきかなくなっている。息を切らせば、重苦しく淀んだ空気を飲むように喉へ送るばかりだ。太い根は彼女の体重を載せても軋みすらない。

布に包んだはずの豎琴が、何かに当たって乾いた音を奏でる。まぶたを開けると森の奥、明るい緑に輝く一角がある。暗闇を隔ててその上にひとり、古代の衣装で身を包む詩人が座していた

。深く頭を垂れ、手にはあの豎琴がある。石花娘は布をほどき、背の豎琴を明るい緑にかざした。豎琴のシルエットから、弦が消えている。

詩人の弦が弾かれた。古い旋律に詩はなかった。クルートドゥルーの詩は繁栄から滅びまで、すべて歌い尽くされていた。

旋律が終わり、詩人は面を上げる。落ち窪んだ眼窩は紛れもなくエツベルにも見え、白磁に似た色味のない頬は例えようもなく美しかった。詩人は膝の後ろから、緑に覆われた朽ちかけの頭蓋を片手に取り出す。それを膝に載せ、再び豎琴を構えた。

彷徨える詩人達よ  
声失いし木霊達よ

されこうべだとして  
叩けばもっと良い音で歌うだろう  
されどこの虚ろな旋律は  
お前達には歌えまい

亡国の歌は  
その色をなくし  
その心をなくし  
その魂を失った  
呼ぶ声は  
誰にも追いつかぬ

歌は影と去り  
旋律の記憶のみが残される  
幻は晴れ夢は覚める

営みの温もりはすでに失せた  
だが私の頬に流れる涙は  
いまだ熱いのだ

詩人が歌い終わると、石花娘は地に伏せた。この場に辿り着くまでに何があったか、失った記憶を取り戻すようにひとつずつ胸に戻っていた。何物にも執着を見せず、彼女はあらゆる場所から立ち去った。鈴を両腕に鳴らす老いた義母の姿も、煌びやかな遊女らの舞台も、陰鬱な異人医師の診療室も、遥か遠い。それらはさらに遠いところへ行くだらう。彼女は豎琴を手にとり、道に残されていた。クルートドゥルーの詩人達がさまよった道は、この先も果てがない。

顔を上げると、世界は一変している。彼女は白い塩の砂漠にいた。彼方に空よりも濃い紺碧の

湖が広がっている。青色と純白に分けられた世界は、その眩さに瞼を長くは開けていられない。彼女の背後には一本のカントウヤの枯れ木が立っている。仰ぎ見る巨木は塩にまみれ乾ききりながらも、割けることなく形を保っている。遠くには根の層を露出させたカントウヤの枯れ森。絡み合う森の土台はセゲアテルの宮殿にも負けぬ高さがあるだろう。やはりあの森は土が流されようとするべき場所に、朽ちることなくとどまり続けていた。

やがて日は傾き、純白の大地は紫紺の闇に染まりはじめる。巨大な月が地平から離れ、湖は渚を広げた。揺れる水面に星明かりが映った。

塩に痛んだ金髪が、風に吹かれて両肩をくすぐる。石花娘は豎琴を拾い上げる。弦は失われ、胴に張られた皮は朽ちていた。彼女は北へ向かって歩み出す。かつての東大北道があったかもしれぬ場所を。

日が暮れると旅人達の家には彼らの話を目当てに、地元の者達も集まってくる。テーブルからテーブルを飛び回り、客に愛想を振りまく娘達の姿は、西州の踊り子衣装だ。黒縁の襟をツンと立て、華奢なうなじを目立たせている。丸い腰には涼やかに鳴るワルバが下がり、緋色の裏地が覗く袖から細い指が見え隠れする。

娘達は狭い舞台に集まり、傍らの老いた詩人がアーリの弦に弓を置く。郷愁を誘う調べに、一時人々は静かに耳を傾けた。それはあまりに長く旅の道にいて、我が家の姿や家族の面影を忘れそうだと切々に歌う曲である。西州に古くからあるこの歌は、作者の名も忘れ去られたまま、旅人に愛されている。

「あんたも歌ったらどうだね」

宿の主人は隅に座る異人の歌人に声をかける。夕の雨にそば濡れた白金の長髪が両頬を隠し、テーブルの燭台に純白の額だけが明るく照らし出されている。

「どんな歌がいいかしら」

歌人は指先で煮豆の餅をこねながら呟いた。

「何処から来なすった？ 今日東ジュルガの客も多い。素朴な豎琴の音は喜ばれるだろう」

「これは、ジュルガの豎琴ではないけれど」

歌人は主人の方へ顔を上げる。

「天空の道はご存知？ ここから南にあった。西州に通ずる道……」

「南は人が行くような場所じゃない。塩商人が近場で仕事をするだけで、他には何もない。砂漠以上に死の世界だ。あの辺りに道なんぞ通ってたかな。西州へは龍骨山脈を越えなきゃいかんが、それは北の道しかないはずだ。うちの子らが着ている西州の衣装だって、北の道から手に入れたんだ」

宿の主人は首を捻る。これまで迎えてきた客達から、この世のありとあらゆる道と土地の名を聞いていた。彼の記憶にその名の道はない。

「ならばクルートドゥルーは？」

「それなら誰でも知っている。この世の理想郷だ。市井の歌人より、偉いさんのお抱え詩人が好む題材だ。クルートドゥルーの詩人は、神業でもって人々を魅了したそう。クルートドゥルー

は百の宝玉が繋ぐ道だとか。もしかしてそれが天空の道かね？」

「クルートドゥルーは時折、過去の記憶の場所を変えるのよ。塩湖に沈んだのが最初。そこから何度か時間を旅し、私が知る限り、天空の道が最も新しい時代のクルートドゥルーになった。幻影の国はクルートドゥルーの詩人に歌い継がれて、大地をさまよっている」

歌人は豎琴を爪弾く。舞台の演奏が終わり、人々は見たこともない異人の歌人へ視線を送った。元の色も定かでない汚れた粗布をまとい、靴も持たぬ物乞い同然の姿である。しかしそれに包まれる純白の肌は、たとえ無数の古傷跡が見えたとしても、まだ若く美しい。白金の長髪は腰まで届き、燭台の明かりに煙って輝いた。人々は広く白い額に目を留め、ついでその下に暗く影を落とす落ちくぼんだ両眼を見る。影の奥で濡れた瞳が光った。

「天空の道随一の都セゲアテルで生まれた曲がある」

歌人は豎琴を構え、幾つもの小さな歌を唄った。その多くは人々に懐かしく、あるものはまだ見ぬ異国の姿を忍ばせる。ところが曲の合間に一人の客が声を上げた。

「どうも歌の内容が古めかしいな。なあ、もっと新しい歌は知らないのか。沿岸地方からの芸人どもは海の向こうからいつも新しい歌をもってくる。天空の道とやらからは、新しい歌はないのかね」

「そうね」

歌人は答える。

「新しいものも、みな古くなってしまったようね。クルートドゥルーの詩人達が、昔にここを通ったのでしょう」

「だとすれば、それは相当の昔だろう」

その晩彼女が得たのは、暖炉の側の寝床、そしてわずかな銅銭だった。

天空の道は彼女の足元でいつの間にか溶けて消え、人々の記憶からも失われたらしい。クルートドゥルーの言葉も、当時ほどの力で人を魅了することはなくなっていた。彼女は今となっては故郷とも言える場所から、時によって永遠に隔てられてしまったのを感じた。

食堂に人の姿は消えたが宴の熱は残り、早春の晩の寒さを幾分和らげている。暖炉の燠は赤く、時折火花を爆ぜながら徐々に暗くなっていく。

己自身の身の上や年齢も分からない。あの後どれだけの年月が流れたのか。石花ゆえの正体を持たぬ激しい乾きは、黒水を得る手段のないこの先、どうすればよいのか。

——朽ちるまでは生かされているしかない。トカゲの言った、死ぬには早い無知とやらが何処まで持つか試そう。それにしても、クルートドゥルーの詩人も落ちたこと。歌一つが錦の織物にもなると言われたのに。至宝の妙技もエツベルで絶えてしまった。

幻影の国の豎琴は、持ち主の足を借りて旅をする。塩の都を逃れた都人らが受け継ぎ、幾多の繁栄と滅亡をくぐり抜けながら、クルートドゥルーの記憶を運ぶ。運び手を駆り立てるのは、都と共に沈んだ詩人の呪いだろうか。それとも最後の場所を探しあぐねて彷徨っているだけだろうか。

——あれは確かに夢ではなかったはずなのに。

石花娘は眩き瞳を閉じる。戸口の前で彼女の帰りを待ちくたびれ、立ち去る義母の背中とワル

バの音は、思い出そうにもあまりに遠い。遊女の家扉は閉まり、彼女は夢のない眠りに残されていた。